
フォール・ボックス

成田リナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォール・ボックス

【Nコード】

N1773R

【作者名】

成田リナ

【あらすじ】

とある年の12月4日、観光地として名高い箱根の峠道で、バスが下に転落、乗っていた乗員乗客が全員死亡という事故が起きる。その1年後、再び同じ場所で同じ事故が起きる。会社側は調査委員会を結成するが、何かがおかしい気がする・・・

再び

12月4日 午前10時 箱根旧東海道

僕は、例の場所《事故現場》で、先輩たちと一緒に、壁に向かって合掌をしていた。意味が無いわけではない。ちゃんと合掌をしなければならぬからやっている。

今から1年前の今日、ここでバスがカーブを曲がりきれずにガードレールに衝突、下に落下、バスは大破、乗員乗客全員死亡、という事故が起きた。原因は、運転士の操縦ミス、という事だが、本当は違う。と言っても僕が勝手にそう思っているだけなので真相は分からない。

今日はその追悼式。だから僕は壁に向かって合掌をしている。誰よりも、謝罪の念をこめて。

同日 午前11時 箱根新道須雲川IC付近

1時間後、僕は、会社のバスを運転していた。今日の参列者の送迎を任されたからだ。会社の重役とか、遺族が乗っている。そのバスが箱根料金所に入ろうとしたとき、偶然、いや必然というべきだろうか。取締役の秘書が、取締役に小声で話した。

「取締役、事故が起きました。先ほどの場所です。バスが転落したそうです」

僕はその言葉に衝撃が走った。去年起きた事故が今年も起きた。こんな事があっていいのだろうか。

事故

同日 12時半 箱根湯本駅前

僕はお客様を降ろした後、取締役の駆け寄っていた。

「取締役！あそこで事故って本当ですか！？」

すると取締役は不機嫌そうに、

「ああ？何故君がそんな事を気にするのだね？」

「別に良いじゃないですか！ねえ、どうなんです！？教えてください！？」

「五月蠅い。君には関係ないことだ。さっさと営業所に戻りたまえ」

そういつて僕を避けるようにセンチリに乗って小田原方面と消え去った。クソ：あそこで事故って本当か？でも、何でだよ：ああ：そんな思想に耽っていると、後ろからバスのクラクションが聞こえたので、急いでドアを閉め、ホイールパーク（サイドブレーキ）を解除して、営業所へとバスを走らせた。

同日 13時半 箱根バス芦ノ湖営業所

営業所にバスを戻して部屋に入ると、いつもより閑散としていた。やっぱり、事故があったんだな。そう思いながら、僕は帰還の知らせをし、仮眠室へと足を運んだ。

「ふうー…」ため息をついてみる。そうか、1年前か：

1年前 箱根バス芦ノ湖営業所

その日は旧街道線の担当だった。いつものように出勤すると、体が重い。そこで熱を測ってみると、39度ある。これでは、業務に支障があるので、その日は臨時休みを貰った。仮眠室で体を休めて

いると、代わりの運転手を探している情報が聞こえてきたので、耳を傾けてしまった。

「おい、だれか代わりの運転士いないか？」

「今日はみんな出てますよ」

「そうか：仕方ない、残業手当を出すか。おい、芦田ー。お前行けるかー？」

「え：僕は夜勤明けっすよ」

「残業手当出すからよお。悪いな。よろしく」

「あの…」

そんな会話が聞こえていた。ここで芦田に行くのをやめさせるべきだったんだろう。普段の俺ならそうする。しかし、そのときは、熱で判断力が失われてた僕は芦田のところに行き、

「悪いな、よろしく頼む」

と、言ってしまった。芦田も、

「ああ、気にすんなって。じゃ、いつてきまーす」

それが悲劇の始まりだった。

俺と芦田は同期で友人。そんな仲だった。だからこそ、あいつの運転の腕が確かな事も知ってるし、不安要素なんて何一つ無かった。だからこそ、事故が起きたときのショックはとてつもないものだった。もう芦田はこの世に居ない。身近な人が居なくなるのは初めての体験だ。大切な親友だったんだ。でも、もういない。

1年前 箱根バス 旧街道線 車内

今日もいつもの休日と同じようにバスは人で一杯だ。だから気をつけて運転しないと、人がドミノ倒しみたいになってしまう可能性があるからなー。それじゃ乗りごちも悪いし、ストレスが溜まっちゃうでから、運転操作には特に注意しなきゃなー。

そんな事を思いながら、芦田は臨時勤務を行っていた。

この旧街道線は、急カーブが多く、後半に行くにつれ道幅が狭く

なっていくので、ベテラン運転士が多く在籍する。そんな中、宮野と芦田は別の存在だった。20代前半でここの配属は珍しいのである。

しかし、眠いな・・・やっぱり断れば良かったかも。でもこれ湯本で回送か・・・しかたない、頑張るか！

芦田は箱根新道と交差する急カーブが見えてきたので、半クラッチをしながら3速だったギアを2速へ移し、排気ブレーキレバーを引いた。しかし、

「ん・・・？」思わず声に出してしまった。なぜなら、普通排気ブレーキを作動させれば「シュー」というエア音ができるはずなのだが、ソレがしない。しかし、メーターパネルを見ると、「排気B作動」という排気ブレーキが作動している事を示すランプが表示されている。ならば仕方ない、と芦田は排気ブレーキをやめ、フットブレーキをかける始める。

「！」

また違和感を感じた芦田は、それが恐怖に変わるのに時間はかからなかった。

ブレーキが利かない――

つまりそういう事である。この急カーブを時速80キロで曲がろうものなら、曲がれても間違いなく遠心力でバスは横転するだろう。どっちにしろ、事故は免れなかったのである。事は最悪の方向へ進んで行った。

芦田はホイールパークをかける。しかし、それも利かない。

「クソッ！！」

芦田はギアを2速から1速へと入れ変える。タコメーターの針が上がり、エンジンが唸り始めるが、バスが止まる気配は一向にない。その瞬間――

バスは道路を走っていなかった。

ただわかったのは、落ちている、という事だけ。

同日　　夕方のニュース番組

「えー、本日午後、箱根町で峠道を走行中のバスが、カーブのガードレールを突き破り、崖から落下、バスは炎上し、乗客乗務員共に全員死亡しました。原因は運転士の操作ミスと見られます…」

こんな内容が流れていた。ただ、この報道はウソだ。なぜならアイツが運転操作をミスる訳がない。そんなの偏見だと言う人も居るかもしれない。しかし、これは長年アイツと一緒に仕事していればわかる。何か間違いがあるはずだ、調査委員会の報告書を見せてくれ、というと情報課は、

「いくら社員といえども、極秘資料は見せられません」

の一点張りなのである。とにかく、いくら時間が経ってもいい。アイツの無実さえ証明できれば…

そんな時、僕にチャンスが訪れた。

委員

現在 箱根バス芦ノ湖営業所

僕が仮眠室からでると、

「おい宮野ー」

と、僕は所長に呼ばれた。今の所長は、今年の4月から本社から異動してきた人だ。

「はい」

ところが返事をしたら、ジュエスチャーで、「表に出ろ」と言われた。仕方がないので表に出て待っていると、しばらくしてから所長が出てきたと思ったら、どこか別のところへ行ってしまった。まあ、別のところと言っても駐車場なのだが。またしばらく待っていると、白のスカイラインクーペが目の前に停まる。

「乗れよ」

僕は言われるがままに車に乗り込んだ。

所長と僕を乗せたスカイラインクーペは、箱根旧街道へ入る。その間、僕は口を開く事はなかった。というか、所長が普段とは違う神妙な顔つきだし：

今僕の横にいる上司は今年度から変わった。というのも、1年前の出来事で管理怠慢が発覚したために、その人はクビになった。それで、今の所長になったのである。確か：名前は「今野」だったわけ。その人を一言で表すなら、「フレンドリー」だろう。明るい笑顔で部下達を気遣ってくれる、まるで小説か漫画の中の人みたいだ。その所長がこんなに近くに部下が居るのに、話一つしないという事は、よほどの事があったのだろう。しかも、僕関連で。

「ハァー…」

僕がついたため息を吐くと、所長はこちらをチラッとだけ見た。気がつけば車は事故現場にいた。

同日 箱根旧街道 バス落下現場

「何ですか？所長？」

「・・・」

所長は相変わらず口を開かない。

気づけば5分時間が経っていた。そこでようやく、

「1年前、ここでバスが落ちたんだ」

と、一言だけ話した。またその話か、と思いながらも、適当に受け答えをする。

「知ってますよ。だって、僕の――」

「ダチが落ちたんだろ」

「・・・」

知ってたのか。だったらなんでわざわざあの忌々しい記憶を蘇らせるような場所に来たッ！

「所長！もう、この話は――」

「分かってる。君だって聞きたくないだろうし、僕もこんな事はあるより好きじゃない。でも、確認したいんだ」

「確認？何をですか？」

「あの日、君と君の友達に何があったのか」

それから、僕はあの日に起きた事を細かく話した。途中、何度も辛くなったが、何か変わりそうな気がして、全部話した。

もつとも、ただの妄想かも知れないが。

「そうか・・・」

所長は、それだけ呟いた。

結局、何も変わらないのか。少し話した事を後悔していると、

「ドサッ」

という音と共に、何かが僕の腹に置かれた。

「ん？」

置かれていたのは、一枚の封筒であった。サイズはA4だろう。

「・・・なんですか、コレ」

「君に一つだけ聞いておきたいことがある。お前が今語った事実、果たして本当か？」

「どういことですか？」

「それを確かめるために俺は君にその封筒を渡した」

「はぁ・・・」

「なんだかよく分からないので、早速開けてみることにした。中は
どうやら資料らしい。」

「ッ！」

始めはよく分からなかった。そこに書いてあったのは、

「箱根旧街道線 バス落下事故調査委員会」

「そんなような事が書いてあった。」

「所長、どういことですか？」

「真実が知りたいのなら、君がそこに入ってすべて暴いて来い」

「・・・分かりました」

「今思えば、本当にいい所長だな。」

翌日 自宅

昨日その後、僕は通常業務から外れる事になった。なぜなら、事故調査委員会に所属する事になったためだ。期間は1ヶ月、って、やけに長いような気がするが、まあいいだろう。ここでは上司に従いつつも、周りとは違う行動をしなければならない。それは、所長に言われた事を守るためだ。上司の命令だからではない。ただ、僕個人として真実が知りたい。そんな気持ちでやることにした。さて、そろそろ出ないとな・・・

同日 箱根バス株式会社 本社

「寒い・・・」

神奈川県と言えど、ここは西湘である。冬場はとても寒い。昨日

少し降った雪のせいで、家からの道路が凍結していたため、危うく事故りそうになったのは秘密だ。

「スタッドレス、買おうかな・・・」

今年ようやく貯金を叩いて、クラウンアスリートを買った。まさか、働き始めて3年でクラウンが変えるとはなあ。そんな事を考えつつ、地下からエレベーターに乗り込む。

箱根バスの本社は、小田原にある。最上階からの眺めはなかなかのものだが、確かにでかいな。よく景観保護の規制に引っかかるなかったものだ。

会議室がある10階にエレベーターは到着し、降りると目の前には、「バス落下事故調査委員会」とご丁寧に紙が貼ってあった。やれやれ、今日から大変だな。

一人の女性

「えー、それでは、いまから事故調査委員会の開会式を執り行います」

と言ったのは仕事ができるのか？っておもうぐらいの老人であり、なんだか胡散臭いオーラがあふれ出ている。僕が何処に座っているのかというと、前を向いて右端、一番後ろにいる。大学の教室みたいな会議室は、それなりの設備が整っている。

「えーでは、いまから出欠を取ります」

おいおい、学校じゃないんだぜ。なんてことを考え、自分の番が来て適当に返事をする、その次の人の声に妙な違和感があった。

「えー、小田芦菜」

「はい」

なるほど、女性だったからか。小田芦菜と呼ばれた女性は、僕の隣のテーブルに一人ポツンと座っており、髪型はいかにも現場で働いてる感じをだしている、ポニーテールだった。しかし、僕には何かが引っかかっていた。何だろう？どこかで会った事があるのかな・・しばらく彼女を凝視していたせいか、彼女は不思議そうにこちらを見返してきた。あわてて視線を前に戻すと、委員長が簡単な事故の説明をしていた。

本社 会議室前休憩室

初日の集会は、出欠確認とそれぞれの分担について発表された。僕は、例の小田さんと一緒に、情報室からの情報提示や、お茶出し、事故調査書を文章化する雑務係だった。まだ若いということから現場には出してもらえない。それに、みんな年寄りばかりでPCをロクに使いこなせるような人間が居ないためこのような配役になった。ちなみに今、僕と小田さんは休憩室にいる。僕はコーヒーを、小

田さんはお茶を飲んでいる。そういえば、さっきの顔合わせ以外で喋った事ないな。よし、少し話してみるか。

「さっきはどうも。君はこの所属なの？」

「え？あ、はい、私は小田原営業所所属です」

急に話しかけられたせいか、すこし目を見開いて僕を見ている。うつすら紅に染まった頬が、すこしかわいい。

「小田原かー。何に乗ってるの？」

「私ですか？私は、スペースランナーですよ」

「おお、10mか。意外だな」

「意外って何ですか意外って。そういうのを偏見って言うんですよ」

顔を若干膨らませて怒る。

「あはは、ゴメンね・・・」

「いえいえ。分かっていただければ、それで」

「あなたこそ、どこの所属なんですか？」

「えーと、それは言わなきゃだめかな・・・」

「あなただけ言わないなんて、ずるいですよ」

「んー、僕の所属は、芦ノ湖営業所だよ」

「えっ：ああ、そうなんですか。車は？」

「エアロミディ」

「大型ですか？」

「うん」

こんな会話ばっかだった。正直、なんか小田さんと僕は何か似ている気がするんだよな。あー、こういうのって世間一般でいう「中二病」ってやつなんだろうーなー。なんて思いながらも、何か引かかるものは確かにあった。

本社 駐車場

なんやかんやで初日は無事終了した。神奈川と言えど西湘は寒い。

とつとと愛車にもどると、隣には嫌がらせかとツツコミたくなるような、ベンツが停まっていた。たぶん、最新モデルじゃないかな：横目で流しながらふと運転席を見ると、そこには先ほど見たばかりの人物が居た。

「小田さん!？」

「あれ？宮野さんじゃないですか？どうしたんですか？」

「すごいクルマですね：」

「いやあ、ここのお給料ならコレくらいは乗れますよ」

「まあ、確かに：」

「宮野さんだって、クラウン乗ってるじゃないですか」

「まあ、ね」

「ここはお給料高いですよー。倍率も増えてるみたいだし」

「うん。だね：」

「どうかしました？」

僕が何か変な表情をしていたらしく、そんな事を聞いてきたっぽい。

「いや、何でも。じゃあ、明日もおねがいます」

「はい、じゃあ私はコレで」

と言ってベンツはエンジン音を駐車場に響かせながら地上へと消えていった。

翌日 本社

次の日から委員会は本格的に始まった。といっても、僕たちは雑用なのでたいしてすることも無いのだが。

「暇ですねー」

「ですねー」

そんなやりとりが続いていた。本当に暇なのである。だからこうやって、情報室でのんびりしているのである。あー、早く通常勤務に戻りたい・・・

ちなみに、情報室にいるのは二人つきりである。どこかのお話なら展開のひとつやふたつあってもおかしくないが、そんなことはない。この部屋は静まり返っている。てか小田さんスーツじゃなくて制服着てるし。

「小田さん、なぜ制服を？」

「まあ、癖ですかね」

「癖？」

「なんか、これ着てないと落ち着かなくて」

「ああ、なるほど」

わからなくもない。僕もなんとなくスーツは好きじゃない。やっぱり、どこか似ているのかも。

「あの・・・宮野さん」

「ん？」

最初に話しかけてきたのは小田さんのほうだった。

「なんか、二人つきりで何もすることないですね」

「うん・・・」

おい、なんだこの展開。

「で、もうすぐ昼なんで、何か食べに行きませんか？
きつとなにかの始まりだな。」

昼頃 小田原駅

小田急線の改札横にある立ち食い蕎麦屋に来た。小田さんの行きつけだとか。なかなかの味である。どうせ蕎麦を食すなら箱根まで行ってもよかったのだが、さすがにそこまで暇ではない。

「んー、やっぱりお蕎麦おいしいなー！！」

蕎麦を笑顔ですする小田さん、すごくかわいい。

「たしかに、立ち食い蕎麦にしてはおいしいかも・・・」

「宮野さんは芦ノ湖なんですから毎日お蕎麦食べられるんじゃないですか？」

「いや・・・僕はいつもコンビニだからね」

「えーっ!? 蕎麦食べないんですか!?!?」

「うん・・・たまにしか食べないな」

「もったいないですよ」

「そうかな・・・」

「そうですよ! 私が箱根（こもろ）バスに就職したのはお蕎麦を食べるためでもあるんですから・・・」

「よく就職できたな・・・」

「なんか言いました?」

「いや、なんでも・・・」

小田さんの以外な一面を見つけてしまった。のか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1773r/>

フォール・ボックス

2011年11月14日22時31分発行